編集後記

川柳の部

宮塚　肇

前年をやや上回る五十二名の方々からの応募がありました。「孫」、「老い」、「八十路」、「断捨離」、さらに切実な「物忘れ」、「入れ歯」、「認知」、「徘徊」、「訃報」などの高齢者ならではの文言のある句があり、同年代の一人として納得し、共感いたしました。

二〇二二年は、コロナ感染の脅威がいまだ冷めやらぬ中、二月にロシアによるウクライナ侵攻が世界を震撼とさせ、そして国内では七月に元首相の銃撃殺害という驚天動地の事件がありました。まさに、世界史上にまた日本史上に、大きな汚点を印した年でした。

ウクライナ侵攻に対する想いを詠んだ句がかなりありました。中でも、「泣く母がウクライナにもロシアにも」（守田貴美子）に強く惹かれました。命を産み出す母の悲哀が五七五に凝縮されています。国の名において若者に命の奪い合いをさせる戦争の絶対悪を普遍的に訴える名句だと思います。

国内の銃撃事件を詠んだ句は、ほとんどありませんでした。裏に築かれていた大きな暗い闇のために文芸の題材として川柳で表現するほどには事件を昇華しきれていないのでしょう。

五七五の韻律は同じ短詩文芸であっても、自然や四季の変遷が対象となる俳句とは異なり、人を対象にする川柳です。人の営みの結果である大きな事件に対し、同時代に居合わせた者が川柳の形で遺すのは大いに意味のあることでしょう。

九月には、コロナ感染に配慮しつつふじさわ川柳大会が二年ぶりに開催され、七〇名近くの参加者がありました。従来よりも課題数を少なくし、その代わり選句された上位三句（天・地・人）への選者からの講評がありました。規模という点では従来よりも縮小されたとはいえ、内容が充実した大会となった感がありました。

俳句の部

堀口　みゆき

コロナ禍も終息の兆しが見え、数年間中止となっていた各俳句大会も、昨年秋から一遍忌俳句大会をはじめ再開の運びとなってきました。この号も昨今の俳句ブームの流れもあり、一一四名の方々の応募を頂くことができ、今回から編集委員として「一葦」の名編集長、中根美保氏が加わって下さり嬉しい限りです。

応募者の中には、昨年度の俳壇賞を受賞された渡部有紀子さん、神奈川現代俳句協会の湾岸大賞を受賞された山下遊児さん等のお名前もあり、皆様の励みにもなると思います。

今回の編集段階で気が付いた中に、漢字の部首の問題がありました。特に、〈しんにょう〉及び〈しょくへん〉について等です。部首については歴史的変遷もかかわってきます。例えば身近な地名の辻堂の辻は現在〈二点しんにょう〉になっていますが、私が小学校時代の辻は〈一点しんにょう〉でした。実際に辻堂駅の表記は現在〈二点しんにょう〉になっており、PCを打つと現在のPCでは辻堂は〈二点しんにょう〉になっています。一九八一年の常用漢字表では〈一点しんにょう〉に統一されており表外字ということになっていますが、その後、二〇〇四年改定のJISでは二点に変更しています。〈しょくへん〉や〈しめすへん〉についても同様のことが言えます。部首の件は、例えば新聞社によって辻を〈一点しんにょう〉に、餅の部首を食に、祇園の祇の部首をネにしており、表外字については絶対的なものではないようですが「文芸ふじさわ」57号では〈しんにょう〉の部分を二点に、餅の部首は食ではなく餅になおしてあります。字源をみていくととても興味深いものがあり、象形文字から発していることがわかります。

日本語ほど難しく複雑な言語はないと言われていますが、こんなに繊細で美しい言語は他にはありません。時代と共に若い世代では簡略化したり、正反対の意味になっている言葉もあります。「やばい」ということばは、かつては「まずい」とかよくない意味に使われていたのですが現在は「すごい」「すばらしい」といった意味に変わってしまいました。

今後、日本語がどのように変わっていくのかわかりませんが、せめて文芸の世界において、伝統的な部分を残していった方がよいのではと思っています。

短歌の部

「短歌を作るということ」

太田　博

文芸ふじさわ57集短歌部門の編集を了へほっとしている。

57集には二十四名の方が応募され作品を寄せられた。一部の人が参加を見合わせたのに対し、新たに四名の方が加わり作品を寄せられたので、結局差し引き前集に比べ二名増となった。年々出詠者が減少していただけに、これが歯止めとなり、少しでも出詠者がふえることを期待した。作品を寄せられる方は、多くは七十代以上の高齢者と思われるので、健康上の理由などで参加を中止する人もあるのではと考えている。

・

歌誌「歩道」を創刊し、歌壇の第一人者として多くの歌人を育成した佐藤佐太郎は、その著「短歌を作るこころ」の中でつぎのように教えている。

「ばくぜんと短歌を作ろうとしても歌はできない。それで物を見るということがまず大切だ。眼にふれるもの、耳に聞くものすべてが短歌の材料であるが、実際のすべてが言えるものでもないから、時間的には瞬間として、空間的には断片として、何か感じたものをとらえるのがいい。短歌を作るために物を見るのだが、やがて短歌を作ることによって物がよく見えるようになる。」と述べ、さらに"修練"の項では「自分の見たままを、自分の自由になる言葉で現せばいいのであるが、その自由になる言葉というものは、努力によって習得されるから、おいおい豊富になって行く。言葉が豊富になれば、表現も自在になる。何事もそうであるが、短歌でもやはり修練を積み重ねて進歩してゆくものである。修練は実際に作るということが第一である。次にすぐれた作品を読んで学ぶことが必要である。すぐれた作から学ぶことをしなかったらいつまでたってもひとりよがりの程度をぬけでることができない。作歌の楽しみも低いところで終っては残念であるから、ある程度の努力をして勉強するようにしたいものである。」と教えさとしている。

五行歌の部

橋本圭子

今年も「文芸ふじさわ」五行歌の部にご参加下いまして有難うございました。

私が子育てから解放された頃、藤沢に五行歌の会が新設されると誘いを頂きました。試しに参加してみますと、各自が持ち寄った歌を囲んで、気取らず和やかな雰囲気で合評する集まりでした。発表された歌のモチーフも様々で、自然の美しさを写した歌・時々の心情を詠んだ歌・時事問題を題材にした社会詠など。身近な題材を日常使っている口語体で五行にまとめたものでした。これなら素養のない私にも、生涯楽しめそうだと感じて、入会を決めました。

神奈川を中心に現在十四の歌会があります、私は鎌倉・横浜など他の歌会にも遊びに出かけて、歌友と交わり良い刺激をもらっています。

月に数回の歌会は、私の生活の楽しい句読点となって、人生を豊かにしてくれていると感じています。

昨秋、以前に詠んだ自作の五行歌を改めて読み返す機会がありました。その作業を通して、この二十余年間の自然環境や社会情勢の変遷・家族との生活・自分自身の心情の変化等を思い起こし、感慨深いものがありました。

特にこの三年はコロナのパンデミック・温暖化による自然災害・ロシアの侵攻戦争など世界規模の重大問題が多発し、私達の生活にも多大な影響を及ぼしています。この混迷は人間が長い間、科学の進歩こそが、文明発展の途だと考え、己の欲望だけを追求して、競い合って招いた悪しき結果ではないでしょうか。平和の大切さを痛感している今こそ〈地球は一つ。そこに生きる命は一連托生〉と肝に銘じて、互いを理解し協調に努め、未来に明るい希望を繋げたいものです。五行歌を楽しむ私達も明日の平和を信じて、健康で明るく過ごしましょう。

世界中の人が
仲良く
健康で穏やかに
平和に
暮らせますように

現代詩の部

山田　美智子

「文芸ふじさわ」第五十七集を皆様のお手元にお届け出来る事を心から感謝致します。

令和四年は、国内外において大変大きなニュースが駆け巡った年であります。

北京五輪での日本選手の活躍で開け、六月には英国女王在位七十年という、歴史上の最長在位を世界中の国々の人々が祝い、かたや、ロシアのウクライナへの侵攻が激化する中、国内では著名な方の訃報が続きました。

新型コロナウイルス感染症は、私たちの暮らしのなかに予防対策の樹立を余儀なくさせ、新しい生活様式の定着が、この数年で「あたりまえ」の様式として顕在するという‐変化を疎んじても逆らえない状況で、日々をやり過ごす「今」だと思われます。

さて、今集の作品から。「色材」を読んで思うのは、現代は学習教材等も紙ベースから電子化に加速し、どこでもワイファイルーターにより、スマホが繋がれる時代です。難解な漢字や読み方は、電子で変換出来る時代になっています。参考書を見開かなくても、感性で文字変換する事が可能です。しかし、若い感性の作品は、それだけに現実逃避しやすく、リアルさに欠ける点があります。体験や経験則からの声に真摯に耳を傾ける姿勢が必要だと感じました。「オレンジ色のりぼん」は作者が体で感じ取った感性をうまく出している作品。日常の見慣れた風景からの、ご自分の体を通して生み出された詩の行は、平明でもどこか温かさを感じます。「やさしい声」は、作者のこころの内からの声、作者にとって大切な声なのだと感じました。「好きな言葉」は時代の写し鏡の言葉もあれば、青春時代の思い出のような感性の言葉もあったりして、列記された言葉に作者の込めた想いは一体どの様なものかを尋ねてみたくなります。「いつまでも少年のようでいたい」は、前を向いて歩んでおられる作者の逞しい姿を思います。「詩」の作者は意思がしっかりされた方のようにお見受けしました。文字からも闊達さが伺われます。「花とメッセージ」の作者には、毎回愉しまされます。ペンネームのユニークさも良いです。おおらかな作品ですね。「生きねばね　行かねばね」は、年配の方の作品から、人生の歩み方を教わる事もあります。くよくよしないで生きて行こう‐と。「愛情」の作品で、『ありがとう』という感謝の言葉を忘れがちな日常を省みる事が出来るようです。「時なしの花」では、ＯＫのフレーズに、張り詰めたものがどこか緩んだ様に感じました。花からの癒やしでしょうか。

皆様、これからも継続して書き続けて下さい。次集でまたお会い出来ますように。

随筆の部

新田　愼二

今回の応募者は28名で、前回に比べると大きく減少しています。これは新規投稿者が5名と大幅に減少し、加えて継続投稿者も減少したことによるもので、ここ数年続いた作品数の水準を割り込むことになりました。

継続投稿者の場合、比較的に高齢者が多く、体調などもあって一定数の減少はやむを得ないことですが、新規投稿者の減少は残念なことです。新しい投稿者を増やさない限り、絶対数は増えません。年に1回の募集ですから、募集していることを知らないまま機会を逸しているとすれば、それは残念なことです。

文章を綴るという作業は結構面倒なことで、何かに発表するとか、強いインパクトによってとりかかるものです。そのための一つの「場」として「文芸ふじさわ」の存在があると思います。応募作品の多寡は藤沢市の文化度の指数でもあります。すべてのジャンルにおいて、できるかぎり多くの市民の方々が参加し、立派な紙面となるよう我々も協力してゆきたいと考えます。

良い文章に出会うと幸せな気分になるものです。今回応募された方々は、内容から高齢の方が圧倒的に多く、80代と思われる方も多数おられます。高齢であっても健筆な方が多く、集まった作品には、快いテンポでご自身の生活ぶりを紹介され、思わず微笑むような文章や、なるほどと首肯する説得力のある内容などがあり、編集しながらずいぶん楽しませていただきました。原稿は基本的に原文通り載せています。

文章を書くという作業は、右脳と左脳を同時に活性化させると言われています。具体的には記憶をつかさどる海馬という部分や、構成をつかさどる前頭葉という部分を使って、脳は文章を組み立てて行くのです。使うことによって脳は鍛えられ機能は保てますが、使わないとどんどん劣化します。書くことは高齢者にとって、認知症を遠ざけ、若さと健康を保つ最適な頭脳トレーニングだと言えます。若い人にとっても、文章の構成力の強化は説得力につながる有力な武器となります。

随筆は、形式にとらわれず、テーマも自由です。身辺雑記のみでなく、世界や日本で起こっていること、藤沢市の風土、歴史や現在、私たちの日常生活、旅行記、折々の思いなど、いろんな視点からテーマを引っ張り出し描いてみてください。そしてそれは現在の藤沢を書き残すことになり、私たちの貴重な財産となります。

「文芸ふじさわ」は現在の私たちから未来へのメッセージでもあります。